

## 唐津の旅にて

川上 香

江戸東京博物館

A trip to Karatsu, Saga  
Kaori KAWAKAMI, Edo-Tokyo Museum

「こんなに降ることはめったにない」という雪が、唐津に到着してからずっと降り続いていた。私の旅はいつも晴れ。「超晴れ女」の力も2009年はどうやら及ばなくなったらしい。

私は焼き物が好きである。この地の唐津焼、中でも絵唐津と呼ばれるものは、草花が筆で自由に描かれている。古唐津になると、もはや、いい加減なのではないかと思う程、のびのび描かれているところが好ましい。

ギャラリーで手にした唐津の窯元である帆柱窯の説明書によると、唐津焼の技法は、鎌倉室町時代に渡来した朝鮮の陶工によって伝えられ、室町初期から中期には、「岸岳焼」とか「稗田焼」と呼ばれていたのだそうだ。地形図を見てみると、岸岳は標高300メートル弱の里山のように、周囲の斜面には現在も「稗田」という地名が記されている。一般に焼き物の登り窯は斜面が利用される。燃料の薪炭が豊富な山間地は登り窯の条件としてかなっているのだろう。「稗田」では、窯もあり、きっと稗も作っていたに違いない。私が持っている古唐津の陶片の様子は、陶工が目の前にある稗をさっと描いたものかもしれない。

夜は、明治時代から続く老舗の宿を奮発した。唐津焼の著名な作家の器で、夕食を食べさせてくれるのだ。大正元年に改築されたという木造の趣のある建物。玄関や廊下、それぞれの部屋には花が活けられていた。10年以上華道を修めている連れの人友は、この花は、ただ家庭などで活けてあるものとは全く違い、もう作品だと言う。唐津焼に美しく活けられた花は、素人の私にも凛として見えた。外はしんと降る雪。部屋の花をほの暗い中で見ていたら、お堂の中で仏様を見ているような気持ちになり、ずいぶん長い時間、花と対峙してしまった。翌朝、友

人にそれを言うと、

「何かあるよねえ。うまく言えないけど、お花を活ける時って自分の精神状態がわかるの。5分で上手く決まるときもあれば、30分やっても駄目な時がある。それで、今日の自分はこうなんだってわかるの。」

と言った。花を活けるとはそのように自分と向き合うことなのか。そうして活けられた花は、観賞の域を超え、花の中の神性のようなものを見せるのだろうか。

いくつもの「作品」の中で、粟を活けたものがあつた。仲居のたまえさんに、写真を撮らせてほしいとお願いすると快く応じてくれた。花屋の仕入れならわからないだろうが、粟の出身地が知りたくなった。たまえさんは、

「花守が見つけてくるのでわからないんですよ。」

と言うや、粟を一本引き抜いて、花守さんのところまで駆け出して行ってしまった。

ほどなく花守の陽子さんが、活けてあつた粟を二本とも包んで現れた。プレゼントしてくれるという。作品を崩させてしまったことに恐縮しながら、それでもとてもうれしくて、改めて粟の出身地を聞いてみた。

「ここよりもっと山の方、確か肥前町の畑にあつたのを、面白いかなと思って青いうちにとつておいたものです。」

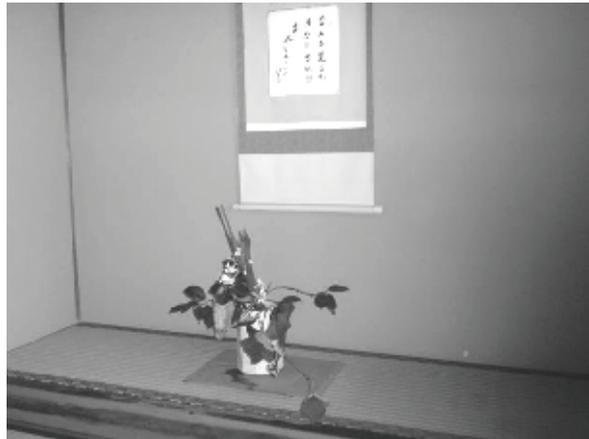
と教えてくれた。陽子さんの存在は有名で、彼女を以前に取材した佐藤隆介氏の「唐津の宿の女番頭」(『翼の王国』ANA 2003. 04)によると、宿の花は、すべて陽子さんが唐津近郊の山々を歩きまわって、自然の四季の恵みを頂戴してきたものなのだという。山の持ち主や農家と仲が良く、陽子さんなら、間引いてやったほうがいいところしか伐らないと知っているのだから、喜んで蒐集に協力してくれるのだそうだ。宿のホー

ムページには5月の花材が 28 種類紹介されていた。野アザミ・踊り子草・二人静・ホウチャク草・ムサシアブミ・ハクサンボク・マムシ草などなど、陽子さんの植物の知識を思わずにはいられない。

そんな花守さんが選んだ粟。もっと花守の仕事や雑穀の話聞いてみたかったが、チェック

アウトの時間がきた。粟を紙袋に入れ、飛行機の中でも膝に乗せて帰ってきた。佐賀県の山間にも粟の栽培がまだ残っているのだ。この粟はどんな人が栽培し、どんなふうに使っているものだろう。いつか訪ねてみたい。

私の古唐津の様子は、粟であるのかもしれない。



参考ホームページ

洋々閣 <http://yoyokaku.com>